

◇ 8月の天文暦 ◇

| 日 時 | 記 | 事 |
|-------|------------------|---|
| 1 12 | 下 弦 | |
| 5 24 | 月 最近 | |
| 6 04 | 水 星 東方最大離角 (27°) | |
| 7 12 | 立 秋 (太陽黄経 135°) | |
| 8 04 | 朔 | |
| 11 22 | セレス 衝 | |
| 7~15 | ペルセウス座流星群 | |
| 15 12 | 上 弦 | |
| 17 21 | 月 最遠 | |
| 19 07 | 水 星 衝 | |
| 23 12 | 処 暑 (太陽黄経 150°) | |
| 23 14 | 望 | |
| 25 05 | 土 星 衝 | |
| 29 19 | 金 星 西方最大離角 (46°) | |
| 30 18 | 下 弦 | |

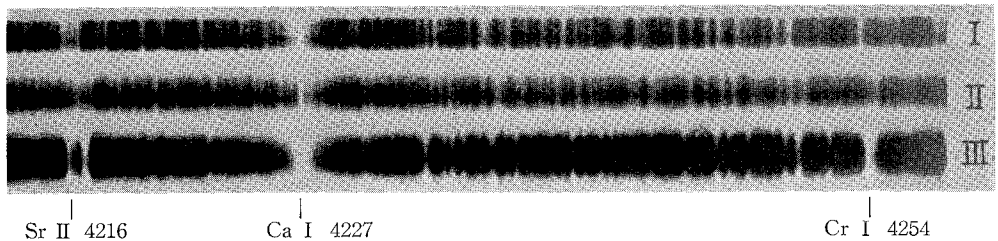
ヘルクレス座α星

ヘルクレス座α星は角距離5秒の実視連星である。主星は3.1~3.9等の不規則変光星で、スペクトル型はM5 II、干渉計で測られた直径は太陽の数百倍という超巨星である。伴星は5.4等のG型の巨星で、スペクトルを

調べると、視線速度が51.6日を周期として変化する。つまりこの伴星自身が分光連星なのであるが、詳しく見ると、中性カルシウムの4227Aの線や、電離カルシウムのH・K線などは変化せず、また他のG型星に比べて著しく細く深い吸収を示す。主星のM型のスペクトルでも、これらの線は、他の線より視線速度が少し負の方(接近)にずれ、G型星の同じ線とはほぼ一致する。(図でIとIIは異なる日に撮ったG型星のスペクトルで、大部分の線はIでは左に、IIでは右にずれている。IIIはIIと同時のM型星のスペクトル。)

これらの吸収線はすべて原子またはイオンの基底状態から生ずる強い線で、低温度の稀薄な拡った大気存在を示し、視線速度の一致は、M型星とG型星を一緒に包み込むような大きなものを考えさせる。二星の間隔は約700天文単位で、太陽系に比べていえば、M型星は小惑星の辺りまで膨らんでいて、プルートーの20倍くらいの距離に分光連星があり、更にその外まで稀薄なガスが拡っていることになる。

カルシウムの電離の状態からみて、このガスは決して一様ではなく、雲状をなしていることが推測される。これらはM型星から放出されて、10km/secくらいで空間に拡って行き、その結果そのまま続けば星は3千万年で太陽質量程度を失うことになる。星の周りの拡った大気は、低温の超巨星には普通に見られる現象で、このような静かな質量放出は、新星の爆発と共に、星の進化の終末についての重要な問題である。



東京における日出入および南中 (中央標準時)

| Ⅷ月 | 夜明 | 日出 | 方位 | 南中 | 高度 | 日入 | 日暮 |
|-----|----------|----------|--------|-----------|-------|-----------|-----------|
| 日 1 | 時 分 4 13 | 時 分 4 48 | +23°0' | 時 分 11 47 | 72°3' | 時 分 18 46 | 時 分 19 21 |
| 11 | 4 22 | 4 56 | +18.5° | 11 46 | 69.6° | 18 36 | 19 10 |
| 21 | 4 30 | 5 4 | +14.5° | 11 44 | 66.2° | 18 24 | 18 57 |
| 31 | 4 38 | 5 12 | +10.5° | 11 41 | 62.7° | 18 10 | 18 42 |

各地の日出入補正值 (東京の値に加える)

(左側は日出, 右側は日入に対する値)

| 分 | 分 | 分 | 分 | 分 | 分 |
|---------|-----|---------|-----|---------|----|
| 鹿児島 +41 | +32 | 鳥 取 +21 | +23 | 仙 台 -9 | +1 |
| 福 岡 +40 | +34 | 大 阪 +17 | +15 | 青 森 -13 | +5 |
| 広 島 +29 | +29 | 名古屋 +11 | +12 | 札 幌 -20 | +7 |
| 高 知 +27 | +24 | 新 潟 -2 | +8 | 根 室 -39 | -8 |

